【論文】

スポーツ健康学科生のためのキャリアデザイン
~キャリアチェンジと本意就職~

尾川信之　　岡室悠介　　小林未季代
Nobuyuki Ogawa　Yusuke Okamura　Mikiyo Kobayashi

１．はじめに

2016 年の大卒者で、当初からの第 1 志望に就職する予定の学生は 40.4%である。一方、当初は志望していなかった先に就職する予定の学生は 24.4%である（就職みらい研究所、2016）。6 割の学生が当初の第 1 志望以外の先に就職する予定だが、同調査では入社予定企業への満足度は 81.7%となっている。第 1 志望の就職が果たせないからといって、必ずしも不本意な就職といった構図ではない。

就職活動を始め、企業説明会、就職情報サイト、キャリアセンター、知人・友人などを通して情報が蓄積されていく。そして、様々な気づきが生まれ、新たな関心が生まれることもあろう。一方で志望していた業界、業種、職種、企業に対し、深く知ることで志望度が下がることもあろう。つまり、就職活動開始以降も、様々なことに遭遇することにより、自己の本意に近い就職というキャリアとなる可能性が高いことが示唆される。半面、様々なことに遭遇する機会を自ら持とうとしない場合は、真の本位なキャリアを見出す機会を逃す可能性も示唆される。

キャリア形成に関して、Krumboltz ら（1999）は Planned happenstance theory（「計画された偶発性」理論）を発表している。この理論は自分の満足するキャリアや成功と言えるキャリアを持つ人の多くは、自分に生じた偶然の出来事がきっかけに新たな興味を見出したり、チャンスに変えたりしているというものである。また、それまでの行動によって、そのような偶然の出来事を呼び寄せているとしている。そのような偶然が自分のキャリア形成に貢献するもとすれば、それは計画されていたものと考えることができるということである。そして、キャリア開発とはいかに想定外のチャンスをつくりだし、いかにそれらを活用するかの問題であるとし、自分自身と環境が変化する中、一つの職業にこだわりすぎて視野が狭くなり、他の選択肢が見えなくなることを警告している（クランボルツ、レヴィン、2015）。所（2016）は計画された偶発性の理論の知見には、シャイン（2005）が提唱するキャリアアンカーの理論が不可欠としている。アンカーとは船の錨で、各人のキャリアの指向の根底にある価値観を言う。このアンカーをまず知ることで、そして日々の生活で起こる様々な偶然の出来事の中から、チャンスを見極め、それをものにすることができるというのである（所、2016）。

この理論を先の就職活動に適用すれば、就職活動を始めて、たまたま参加していた企業と出会い、検索した就職情報サイトにたまたま掲載されていた情報に触れ、キャリアセンターにその時たまたまいた職員と会話をし、など偶然の重なりの中で、新たな興味が見出されたと言えよう。ただし、その興味を見出した仕事が、自分の価値観に適合したものか否かは、自身のキャリアアンカーを自覚して就職活動に臨んだかによってくると言えよう。

本稿では、大学入学前に将来就きたいと考えていた職業を大学時代に変更し、本意な就職を果たした学生に、計画された偶発性理論とキャリアアンカーの適用を試みる。また、本稿では大学入学前に将来就きたいと考えていた職業を大学時代に変更する言葉として、「キャリアチェンジ」を使うこととする。なお、社会人がこれまでに培ってきた職務遂行能力とは全く別の職務遂行能力が求められる職業に移ることを現わす言葉として、「キャリアチェンジ」という言葉が使われている。

２．先行研究

（１）職業意識と学部選択

大学の学部選択に際して、将来の職業を意識して選択する学生と、あまり意識しない学生がいる。また、学部によっては職業の免許取得と直結するものもあり、そのような学部を選択する学生は、他学部に比べ職業を意識しての選択者が多いと推察される。ベネッセ教育総合研究所（2005）の調査によれば、医歯薬看護学系統に進学した学生が職業を意識した時期は、小・中学時代 40.0%、高校時代 47.7%となっている。つまり、この学部に進学した学生の約 9 割近くが、将来の職業を意識して大学に進学していることになる。また、教育学系統に進学した学生についても、職業を意識した時期が小・中学時代 42.2%、高校時代 33.7%で、やはり、9 割近くの学生が職業を意識した大学進学となっている。他学部の学生では、高校時代までに将来の職業を意識した者は、5 割を満たない。特に、社会科学系学系統の進学者では、高校時代までに職業を意識した者は約 4 割となっており、先の医歯薬看護系統と教育学系統のそれの半分以下となっている。医歯薬看護学系統や教育学系統では、医師、歯科医師、薬剤師、看護師の免許の受験資格や、教員免許の取得に直結している。従って、これらに進学した学生のほとんどがそれらの免許を取得し、それを活かした就職を目指していると言えよう。

（２）大学在学中における職業選択の変化

将来の職業を意識した学部選択をしたにも関わらず、その進路を変更する場合もある。先のベネッセ教育総合研究所（2005）の中で希望する進路を見ると、高校までに 9 割近くが職業を意識して進学したはずの教育学系統の 4 年生で、教員志望が 57.3%、進学志望が 11.0%となっている。進学志望の 1 割が仮に教育系統の大学院だとすると、2 割程度の学生が教員を目指して教育系統に進学したが、在学中に進路変更をしたものと推察される。

早稲田大学学生部（2013、2014、2016）が早稲田大学の学生に卒業後に志望する進路を調査している（表 1)。いずれの調査年においても 1 年生に比べ学年が進むと、民間企業を志望する割合が増え、一方小中高教員を志望する割合が減少す

表1　早稲田大学学部生の学年別卒業後の志望進路

学年	2016年				2014年		2013年	
	文系		理系		文系・理系合計		文系・理系合計	
	民間企業	小中高教員	民間企業	小中高教員	民間企業	小中高教員	民間企業	小中高教員
1年	63.8%	8.9%	47.6%	4.3%	47.0%	7.1%	40.9%	6.0%
2年	70.6%	5.8%	51.9%	5.0%	48.1%	5.4%	43.6%	4.9%
3年	76.1%	6.0%	54.8%	4.2%	55.1%	4.1%	51.9%	5.8%
4年	76.5%	4.2%	51.1%	3.5%	60.5%	2.7%	62.1%	2.2%

＊2015年はデータの掲載なし。

早稲田大学学生部『第32回、33回、35回学生生活調査報告書』を基に、著者作成。

表2　職業観

収入さえあればよい	楽しく働きたい	自分の夢のために働きたい	個人の生活と仕事を両立させたい	プライドのもてる仕事をしたい	人のためになる仕事をしたい	出世したい	社会に貢献したい
2.8%	29.9%	10.8%	24.5%	6.4%	17.7%	1.4%	6.5%

マイナビ（2016)「2017年卒マイナビ大学生就職意識調査」を基に、著者が作成。

表3　企業志向

絶対に大手企業がよい	自分のやりたい仕事ができるのであれば大手企業がよい	やりがいのある仕事であれば中堅・中小企業でもよい	中堅・中小企業がよい	その他（公務員、Uターン志望など）	自分で会社を起こしたい
10.3%	38.1%	38.9%	8.1%	4.2%	0.4%

マイナビ（2016)「2017年卒マイナビ大学生就職意識調査」を基に、著者作成。

る傾向が認められる。各年の結果は同一入学時期の学生群を経年的に追ってはいないが、2013 年に 1 年生の学生は 2016 年では 4 年生となっている。2016 年のデータは文系と理系に分けられたものであるが、2013 年 1 年生と 2016 年 4 年生とで比較すると、やはり民間企業志望割合の増加と、小中高教員志望割合の減少が見いだされる。

（3）大学生の考える働く意味

マイナビ（2017 年）の行った 2017 年卒の大学生就職意識調査によると、「なにがなんでも就職したい」学生は 87.6%である。一方、「希望する就職先に決まらなければ、就職しなくともよい」とする学生は 12.4%となっている。9 割近くの大学生は卒業後、まず職に就くという意識があるということになる。そのような学生の職業観は表 2 の通りとなっている。職業観で最も多いのが「楽しく働きたい」の 29.9%で、次いで「個人の生活と仕事を両立させたい」の 24.5%である。つまり、楽しい仕事に就き、私生活も大切にした人生を過ごすことを優先して、就職先を選択する姿勢が浮き彫りになっている。

また、「大手企業志向」か「中堅・中小企業志向」かの質問結果は表 3 の通りである。会社の規模より、「やりたい仕事」、「やりがい」を多くの学生が重視しているものと推察される。「自分で会社を起こしたい」というのも、「やりたい仕事」、「やりがい」にも含められるであろう。学生は仕事に楽しさや私生活との両立を重視しているが、だからと言ってそれらが満たされれば、仕事の内容はあまり関係ないとは考えていないようである。自己の職業観を満たし、かつ「やりたい仕事」、「やりがいのある仕事」を追及していると言えよう。

3.研究方法

大阪大谷大学人間社会学部スポーツ健康学科の入学者のほとんどが、入学当初保健体育教員を志望している。また、人間社会学科においても、一部だが英語や社会の教員を志望する学生が入学してくる。本研究では、スポーツ健康学科と人間社会学科の学生で、教員志望で入学し、入学後キャリアチェンジをして第 1 志望に内定、つまり本意就職を果たした学生への聞き取り調査を行った。

4.事例調査結果

（1）保健体育教員志望から旅行会社志望への転換をした A さんの事例

3 歳から水泳を始め、中学校、高校でもスイミングチームに所属をした。しかし、水泳以外のスポーツが苦手で、体育でそのような運動をするとき、辛い思いをした。このような経験をしたからこそ、苦手なスポーツを持つ子どもの気持ちが分かる。だから、保健体育の教員になって、そのような子どもの指導をしようと思った。

大学は保健体育の教育免許が取得できるところを受験した。第 1 志望を含め、幾つかの大学は不合格だった。合格したのは大阪大谷大学人間社会学部スポーツ健康学科と、もう 1 校だった。

1 年生のとき、海外に行ってみたいと思い、3 週間のニュージーランドでの語学研修に参加した。そのことを知った 1 年生でのゼミの教員かて、2 年生でのイギリスへの留学を薦められた。ニュージーランドから帰国後、英語を使った仕事に就きたいと思うようになり、教員を目指す気持ちが薄らいでいった。そして、2 年生で進むゼミを考え、企業への就職が強いという評判のゼミを選択することにした。また、2 年生での薦められていたイギリスへの 5 か月間留学することにもした。

帰国後、英語を使ったアルバイトをやってみたいと思い、関西空港の免税店で働いた。また、スポーツ用品店での販売や、スイミングスクールでのコーチのアルバイトをした。これらのアルバイトで幅広い世代とのコミュニケーションを図れる力が身についたと思っている。

3 年生に入ると就職課が開催する説明会に参加するようにした。そこで、インターンシップの存在を知り、最近ではインターンシップにも内定に直結するものがあるという説明を受けた。夏のインターンシップに参加しようと行政のインンターンシップにエントリーした。選考を通過し、5 日間スポーツ関連の課でインターンシップを行った。仕事は内勤のデスクワークの仕事で、もっと外に出ていろいろやっていると想像していたが違った。

やはり英語を使った仕事に集中しようと航空会社のインターンシップにエントリーしたが、うまくいかなかった。就職課で他の業種も考えるように勧められ、旅行会社にもエントリーを始めた。

そして、国内大手旅行会社の 5 日間のインターンシップに参加できることになった。

3 月からは企業の合同説明会にも参加し、航空会社や旅行会社を中心に説明を聞き、エントリーもこれら業種を中心に行った。そして、第 1 志望の旅行会社から内々定をもらった。

（2） 保健体育教員志望からスポーツ用品メーカー志望への転換をした B さんの事例

高校の保健体育の先生が良い方だった。子どもの頃から野球をやっていて、高校時代も野球部に所属した。将来は、高校の保健体育の教員になって、野球部の顧問をやろうと考えた。

体育系の学部のある大学を受験したが、軒並み不合格だった。そして、大阪大谷大学人間社会学部スポーツ健康学科では保健体育の教員免許が取得できることを知り、センター試験入試で合格した。

1 年生の後期にある 2 年生からのコースやゼミの選択が近づいた頃、自分が教員になる目的は部活の指導であり、スポーツの指導であれば教員でなくてもできると考えるようになった。さらに、スポーツに関わる仕事へと考え方が広がっていった。

2 年生でのゼミ選択では、企業への就職が強いとの評判のゼミを選択した。また、1 年生では友人に誘われ飲食店でのアルバイトをしていたが、アルバイトもスポーツ用品店に切り替えた。スポーツ用品店でのアルバイトでは、グローブの修理をさせてもらったり、スポーツ用品メーカーの営業の方とも知り合いになった。そして、スポーツ用品メーカーの工場見学をさせてもらうこともできた。2 年生に履修した社会研究実習では、スポーツ用品メーカーで革の裁断から製品に仕上げるまでのグローブ作りを行った。

2 年生の終わりにゼミの飲み会があり、そこである競技の競技運営と調査をやろうということになった。たまたまアルバイト先のスポーツ用品店には、その競技機構の関係者が出入りしていた。そこで、アポイントを取り、後日伺わせていただけることになった。そして、こちらの希望の承諾をいただくことができた。

就職活動は 3 年生の 3 月から開始した。第 1 志望はスポーツ系専門商社、第 2 志望はスポーツインストラクターとした。しかし、スポーツインストラクターは契約社員である場合が多く雇用が不安定なこと、また福利厚生が良くないことも多いいので、あまり気のりはしていなかった。3 月から企業の説明会が解禁となるが、合同説明会にはスポーツ用品関係はあまり参加しないので、各企業が個別で開催する説明会に参加した。第 1 志望の業種の企業 5 社にエントリーした。エントリーシートはこの 5 社すべてで通過した。そして、意中の企業から内々定をもらい、就職活動を終えることにした。

（3） 英語教員志望から住宅資材メーカー志望への転換をした C さんの事例

高校時代、英語の成績が良かったので、英語教員になろうと思った。大阪大谷大学人間社会学部人間社会学科では英語教員免許の取得ができるので、指定校推薦で入学した。しかし、1 年生で参加した教師のお仕事体験入門に参加して気持ちが変わった。この教師のお仕事入門は学校現場を訪問し、教師の仕事を体験する内容である。高校のとき出会った教師の姿と、そこでの自分の姿にギャップを痛感した。もし自分が教師だったら、教わろうとは思わないと感じた。そして、教師になろうという思いが自分の中から消失した。

しかし、英語にはこだわりがあり、それを活かして企業に就職したいと考えた。2 年生でのコースとゼミの選択では、英語の授業が豊富な国際社会コースを選択する一方、ゼミは経営情報コースの教員を選択した。そして、かねてから目標にしていた TOEIC スコアの獲得に加え、ゼミ教員から日商簿記も薦められた。授業ではビジネス関連の科目も積極的に履修することを心掛けた。また、ゼミでは関心のある日本経済新聞の記事を解説し、ディスカッションするので、経済・経営に関する記事の理解力と、話す力が身についたと実感している。簿記と TOEIC は当初テキストと問題集を購入し、独学で勉強した。TOEIC については、ある程度スコアが取れるようになった以降、語学学校に通った。3 年生で就職活動を始める段階で、日商簿記 3 級を取得し TOEIC スコアは 655 点になっていた。

就職では「住宅」に憧れがあり、住宅関連の企業に就職しようと思った。そこで 3 年生で住宅メーカー5 社のインターンシップに参加した。また、ゼミの教員から B to B という企業の魅力も聞いていたため、住宅に関連する資材やインテリアの企業についても調べた。

3月から合同企業説明会に参加し、住宅、住宅資材、インテリアの企業の情報収集に努めた。また、ゼミの教員が約1,000社に及ぶ企業や業種に関するDVDを所有しているので、志望する業種や企業のDVDを借りて研究した。さらに、有名企業ではSPIやWEBテストがあるので、対策本を使って勉強した。内々定は4社からもらい、第1志望の海外にも積極的に展開している住宅関連のある資材の国内トップメーカー、B to B企業に決めた。

5.考察

教員になることを目指し、入学後に他の仕事に強い興味を抱き、そして第1志望に就職を果たした学生には何が共通していたのであろうか。行動としての現れ方は違うが、根底にあるものは共通するのではないだろうか。この共通するものを探っていく。

(1)1年生での偶然の出来事と自己のキャリアアンカーの発見

全員が1年生の時に、当初の目標を変えている。このことが、2年生以降のコースやゼミの選択に間に合う結果につながっている。さらに、目指す目標のための準備時間の確保にもつながることになる。

かれらの1年生でとった行動は、再度自分が教員を目指すことの意味を深く考えたことである。そのきっかけが、Aさんではニュージーランドへの語学研修、Bさんでは2回生からのコースとゼミの選択時期、Cさんでは教師のお仕事入門であった。AさんとCさんは学外の場での体験が、自分の本当にしたいことは何かを考えるきっかけになっている。一方、大学入学後の学内においても、様々な情報や出来事にも触れることになる。学外、学内のいずれの場においても、情報や出来事を受け止める側の態度で、自分にとってのそれらの意味も違ってこよう。かれらの根底には、自己の人生を真剣に考える姿勢があり、そのためのアンテナが高いがゆえに、同じ情報や出来事であっても、それらがかれらのアンテナにとらえられたと考えられる。そこでもし「教員」というものが自分のキャリアアンカーであったら、その情報や経験を「教員」という職業に結びつけていたかもしれない。しかし、その偶然に入ってきた情報や出来事によって、「教員」がぐらつき新たな興味を喚起し、そしてその方向を成就させていることを見ると、その偶然はかれらがキャリアアンカーを発見するための「計画された偶然」と言えよう（図1）。

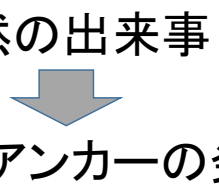

図1　対象事例のキャリアアンカーの発見プロセス

(2)偶然の出来事から必然の出来事へ

教員からの志望変更後、かれらは将来の職業に対してキーワードを持ち、行動している。AさんとCさんは英語を使う仕事、Bさんはスポーツに関わる仕事というキーワードと、民間企業というかられに共通したキーワードである。これがかれらのキャリアアンカーということになる。一方で、まだ指向する方向性だけで、具体的な職業は決めていないのも特徴である。

しかし、このキャリアアンカーが定まった後、かれらは徹底した行動をとっている。まず、企業への就職に強いと評判のゼミ、企業への就職に役立つゼミを選択している。Aさんは1年生のゼミの教員から留学に詳しい先生を紹介され、その先生の薦めでイギリスへの留学を決意した。帰国後のアルバイトも英語を使うアルバイトをしたり、幅広し世代とのコミュニケーション力を身につくアルバイトをしている。Bさんはアルバイトをスポーツ用品店に切り替え、そこで商品知識やグローブの修理技術を習得している。また、アルバイト先の取引先であるメーカーの営業担当者と知り合いになり、工場見学をさせてもらっている。さらに、ゼミで話が出たある競技の運営調査で、たまたまアルバイト先に来る関係者と出会い、話をつけている。Cさんはゼミ教員から薦められ日商簿記に挑戦することにした。また、ゼミ教員からB to B企業の話を聞き、そこからB to B企業にも関心が広がっていった。

Aさんがイギリス留学を決心したのは、ニュージーランドでの語学研修を知った1年生のゼミ教員が、留学に詳しい先生を紹介してくれた偶然の出来事からである。Bさんがスポーツ用品工場を見学できたり、調査をする競技の関係者と知り

合えたりしたのも偶然の出来事である。それが実現したのは、たまたまそのスポーツ用品店がアルバイトを募集していたからである。C さんが日商簿記や B to B 企業を知ったのは、その教員のゼミに入ることを決めた中で起こった偶然である。

これらの偶然は、キャリアアンカーを決めたことにより、一歩踏み出した行動によってもたらされている。その行動がその後の偶然の出来事を引き寄せたと言えよう。それらは偶然の出来事のように思われるが、結果として振り返れば必然の出来事であったことを示唆している（図 2）。

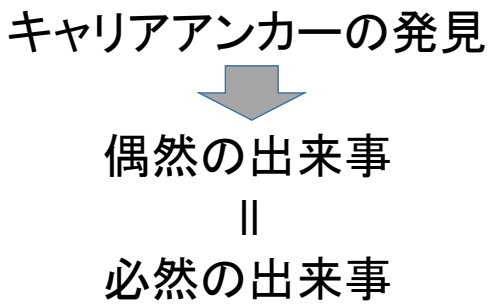

図2　キャリアアンカーの発見以降のプロセス

6.キャリアデザインに向けて

将来、教員に就くことを目標に人間社会学部に入学してくる学生は少なくない。特に、スポーツ健康学科では、多くの入学者が教員を志望して入学してくる。一方、卒業時点まで強くその志望を貫き、教員採用試験の準備をしっかりしている学生は多いとは言えない。多くの学生が在学中に教員以外の就職に変更している。その変更には自発的変更と、非自発的変更があると考える。自ら新たな明確な目標を見出し、戦略的な準備をしている自発的変更学生と、準備不足・成り行き任せでの就職活動突入を迎える非自発的変更学生の存在である。また、自発的変更であっても、その変更の経緯に思慮深さが欠けていたり、時期が遅すぎたりして、本意でない就職となっていることも少なくない。

本研究の調査対象とした学生は、教員志望を変更し、そして第 1 志望に内定した本意就職を果たした学生を調査対象とし、計画された偶発性理論とキャリアアンカーを適用し、共通点を明らかにすることを試みた。その結果、図 3 のような構図が見出された。

1 年生の時、学内や学外での自ら自発的な行動により、様々な出来事に遭遇している。そして、自らの職業意識を見つめ直し、自らのキャリアアンカーを見出している。そして、1 年生後半のコースとゼミの選択の説明会から、新たな就職目標に向けて、戦略的な行動に踏み出している。準備のための時間が十分にあるため、多くの戦略的行動ができ、それにより多くの偶然の出来事に遭遇することになる。その結果、自分が目標に確実に近づいていることを実感し、その循環でモチベーションを維持、もしくは高めている。振り返れば、偶然の出来事が、自分が戦略的行動によってもたらされるべく、もたされた必然の出来事となっている。本研究から、下記の点を提言したい。

・職業観を育成する教育の機会を 1 年生時に充実させることにより、自己の職業的キャリアアンカーを
　再確認させる。

・この再確認後にコース選択、ゼミ選択の説明を十分に行う。

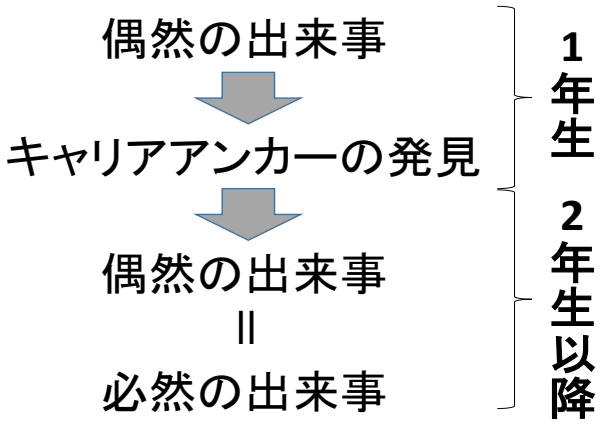

図3　調査対象者の共通点

引用文献

1）エドガーH.シャイン（2005）『キャリアアンカー』白桃書房

2）Krumboltz,John D., Kathleen E. Mitchel, Al S. Levin.　（1999）　「Planned Happenstance: Constructing Unexpected Career Opportunities」 Journal of Counseling & Development, vol.77-2, 115-124

3）J.D.クランボルツ、A.S.レヴィン（2015）『その幸運は偶然ではないんです！』ダイヤモンド社

４）就職みらい研究所（2016）『就職白書2016』リクルート
５）所正文（2016）「人生デザイン理論の模索」
６）立正大学心理学研究所紀要　第 14 号　77-87
７）ベネッセ教育総合研究所（2005）『平成 17 年度経済産業省委託調査　進路選択に関する振返り調査-大学生を対象にして-[2005 年]』経済産業省
８）マイナビ（2016）『2017 年卒マイナビ大学生就職意識調査』株式会社マイナビ
９）早稲田大学学生部（2013）『第 33 回学生生活調査報告書』早稲田大学学生部
10）早稲田大学学生部（2014）『第 34 回学生生活調査報告書』早稲田大学学生部
11）早稲田大学学生部（2016）『第 35 回学生生活調査報告書』早稲田大学学生部